

全集を古書店から一括で購入し丹念にみていくことにした。また『夜船閑話』は重要な書であると思ひ、これもネットでみつけ古書店から実物を購入した。また白隠禅師ゆかりの沼津市原の松蔭寺も三度ほど訪れ、白隠禅師の書画や、人物を模した像をお参りさせていただき、墓参も行った。

さらに先行研究をみていくと、1991年に関西支部の奥澤康正先生が京都医報で、「健康」の初出について調べられていることを知った。中国人の研究者から質問があり調べていたとのことで、今回のテーマの最初の提唱者であった。

研究の結果、仮名法語など著作の16ヶ所に「健康」の語が使用されており、その初出は1751年であることが明らかとなった。白隠禅師と健康の研究資料を取めたクリアファイルは13冊となった。健康への関心から白隠禅師の仮名法語をみていたが、これらの著作から白隠禅師の思想・人柄を知る機会ともなった。禅の精神をわかりやすく庶民に説いている。その願心・工夫・ユーモアのセン

スに触れることで得るものが多かった。日本にこのような仏教者がいたことを知りうれしくなった。そういえば白隠は500年に一人の逸材といわれる人物であった。

医学史を広い視野から研究する本学会において「健康」は保健、医療、衛生、公衆衛生、看護、教育などの領域においても共通のテーマであり、目標とするところである。看護史が専門の筆者にはもちろん「看護思想」が中心テーマであるが、関連する用語としての「健康」にも関心がある。昨今はナイチンゲール生誕200年で筆者もナイチンゲールの看護思想に視点をあてた研究をしている。

今回の「健康」の研究はちょっと寄り道をした思いがある。しかし最近「セレンディピティ」という言葉が流布しており、まさに今回の研究は「素敵な偶然」と「予想外の発見」があり、富士川賞を受賞することができた。

例会案内

日本医史学会 1月例会

令和4年1月22日(土)

オンライン開催

1. 「ペラグラ再考——歴史の変遷と課題——」

伊藤泰広(トヨタ記念病院 脳神経内科)

おもに18~20世紀前半にヨーロッパやアメリカ南部で深刻だったペラグラが、日本で注目されることは少ない。ペラグラ史を概観し、現代での課題に触れたい。

2. 「我が国の腑分けの歴史と近代整形外科の父・各務文献」 今井 秀(今井整形外科)

1800年に婦人の腑分けを行い、さらに真骨骸を解剖して骨関節機構を解明し、その実証的科学精神から整形外科の近代化に貢献した各務文献についてお話しします。

日本医史学会 3月例会

令和4年3月26日(土)

1. 「「五体身分」系医書の研究」富田貴洋(森之宮医療大学大学院修士2年)

平安鎌倉移行期(『喫茶養生記』の後、『頓医抄』の前)に成立した可能性について考証します。

2. 「日本経済の父渋沢栄一の社会事業について」

稲松孝思(東京都健康長寿医療センター 顧問)
経済人・渋沢栄一が取り組んだ社会事業の全貌と養育院事業

以上は変更の可能性がありますが、必ず開催直前に医史学会のサイトをご確認ください。



<http://jsmh.umin.jp/events.html>

しばらくはZoomを用いたオンライン開催を継続いたします。参加方法については、日本医史学会事務局(jsmh@juntendo.ac.jp)にお問い合わせください。

また、本例会でのご発表を随時募集しております。ご希望の方は、演題・希望する月を明記の上事務局(同前)までご連絡下さい。原則として発表者は会員に限ります。

例会記録

日本医史学会 10 月例会

令和3年10月23日(土)
(オンライン)

1. 「本居宣長の医学文書と一字薬名」
吉川澄美(東京都)
2. 第27回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演
「白隠禅師の仮名法語にみる「健康」の語の使用」
平尾真智子(健康科学大学看護学部)

日本医史学会 11 月例会

令和3年11月27日(土)
(オンライン)

1. 「徳川幕府の本草政策と『東医宝鑑』の受容」
吉村美香(愛知淑徳大学)
2. 「『彌性園方函』引用医書についての考察」
三鬼丈知(大谷大学)

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会 合同12月例会

開催中止

例会抄録

西洋医学の原点, 古代医学文書の解読 ——ガレノス中世写本と校訂本の諸問題

福島 正幸

西洋医学の原点ともいえるガレノスの医学文書に関して、中世写本と校訂本の問題点を中心に報告を行った。

はじめに、プラトンやアリストパネスなどの記述を参照しながら、古代ギリシアにおける書物の歴史、とりわけ文書の保管状況について外観した。またそれと並行して、医学文書の特殊事情、たとえばヒポクラテス『流行病』第1・3巻に含

まれる表現から、天候状況に関する記録が蠟板か何らかの形で集团的に保管されていた可能性について言及した。さらにこれまで日本では触れられたことのないガレノス以外の手による(バッケイオス、グラウキアス、ゼウクシスなど)ヒポクラテスの注解書について触れると共に、古代医学文書の伝承過程について報告した。

このようなパピルス文書は、その後中世写本の